



もみじの滝



もみの池



水車茶屋

めぐって みつけて 自然観察学習館近くの 紅葉スポット

緑色の葉は、「クロロフィル」という葉緑素のつぶ木の葉には、もともと、クロロフィル（緑色）とカロチノイド（黄色）というつぶ（色素）がふくまれています。でも、夏の葉は、クロロフィルがカロチノイドより多いから緑色に見えるのです。

落葉樹が紅葉する！

紅葉は全ての木が紅葉するわけではありません。マツやスギなどは1年中葉が落ちない常緑樹で緑のままです。落葉樹は、秋に葉を落とし、冷たい空気にふれる部分をできるだけ少なくして寒い冬を乗り越えるのです。

黄色くなる葉と赤色になる葉とのしくみのちがいがい

秋になって日差しがよくなってくると、クロロフィルとカロチノイドの両方の色素が分解されますが、ふつうは緑色のクロロフィルの方が早く分解されます。そのため、それまでかくれていたカロチノイドの黄色が目立つようになり、黄色く紅葉するのです。それを黄葉（おうよう）とよび、イチョウやタイワンフウなどがそれにあたります。秋になって気温が下がると、地面の温度も下がるので、根が水分をすいあげるのはたらしが弱くなります。すると、葉から水分が出るのをふせぐために、葉の柄の根もとに、離層（りそう）という仕切りができます。離層ができると、でんぷんなどの糖分（とうぶん）が枝に送られず、葉の中にたまりまます。葉の中のこわれたクロロフィルや、たまった糖分が、日光に当たると、アントシアニンという赤い色素にかわります。このアントシアニンが増えてくると葉が赤くなるのです。なぜ赤い色素がつくられるのかは、まだよくわかっていません。イロハモミジやトウカエデ、アメリカフウなどがそうです。

「紅葉」の良しあしを決める3つの条件

- ①日中の天気がいいこと・・・赤い色素となる糖分は光合成によってつくられるから
- ②適度な雨や水分があること・・・乾燥すぎると、葉が紅葉する前に枯れてしまうから
- ③昼と夜の寒暖差があること・・・夜の気温が高いと、昼間作った糖分を使って活動してしまうのであざやかな赤にならないから。



ソラード



けやきの丘



西大路